

## 大阪・関西万博プロデューサーからのご意見

令和8年2月27日  
経済産業省

第1回成果検証委員会での議論を踏まえ、実際に万博のレガシーを継承した取り組みを実施している大阪・関西万博プロデューサーに対して、1月後半～2月中旬にかけて事務局よりヒアリングを実施した。

## 1. ヒアリングを行ったプロデューサーの一覧

テーマ事業プロデューサー	宮田 裕章	氏
	石黒 浩	氏
	中島 さち子	氏
	落合 陽一	氏
	福岡 伸一	氏
	河森 正治	氏
	小山 薫堂	氏
	河瀬 直美	氏
会場デザインプロデューサー	藤本 壮介	氏
会場運営プロデューサー	石川 勝	氏
催事企画プロデューサー	小橋 賢児	氏

## 2. プロデューサーからのご意見まとめ

前回の成果検証委員会の議論を踏まえて整理すると、次のとおり。

## (1) レガシー展開にかかるご意見

(レガシー検討の方向性・全体論)

- レガシーの継承には、映像として残すこと（物語をつくる）、場をすること（人を巻き込む）、イベントを実施することが大事。万博に関わった当事者それぞれが成果を物語化し、発信・継承していくことが大事。（落合氏、石川氏、中島氏）
- 記憶の継承に向けては、モノ（土地の継承）、コト（営みの継承）、ヒト（思考の継承）の3側面に取り組むべき。テーマウィークの継続実施や、プラットフォーム作り（プロデューサー陣による社会人講座、若手クリエイターの育成など）はぜひ実施してほしい。（石川氏）
- 多様な働き方を作るために、障がいのある方にもパビリオンスタッフ・ボランティアとして参画してもらい、働く際のルールや手法を作っていた。会期前の「つくるフェーズ」からも多くの方に関わっていただいた。今回の万博での実績を社会実装に繋げていきたい。（中島氏）
- 万博は、未来の価値観や世界観を、日本が主導した世界的な対話と共創のムーブ

メントによって、広く人々に発信し、問いかける場であった。その発信のためには、事業・イベント企画のプロフェッショナル人材が必要となるどころ、今回の万博で育った人材を散逸させないことがまず重要。(石川氏)

- ・ 大屋根リングは多様でありながらひとつという概念を表現した「調和の輪」である。一見相反する様々なものがごちゃ混ぜでも調和できる力が今回の万博にはあった。世界が分断されている混沌とした時代にこの景色が見られたことに大きな価値がある。万博を本当の意味での「インクルージョン」のモデルとして継承していくことはどんな分野でも活かせる。万博で生まれた気付きをうまく広げていくことが大事。(小橋氏)
- ・ レガシーが単なる記念や思い出だけで終わらないように、特にテーマ事業関係者の役割としては、より本質的なテーマ性(各人各様の多様な)を継承、発信してゆくことが大切。(河森氏)

(万博でつくられた「つながり」について)

- ・ 今回の万博の開催に当たっては、1970年の大阪万博の記憶を自身の物語として抱えていた人々が、運営や機運醸成等に関わってくれたことが非常に重要な点であった。万博の主人公は来場者。万博が人生の分岐点になった人たちに注目して、数十年先まで追いかけて、その物語を言葉にして残していくことが重要。記憶を語り継いでくれる人たちの記録や言葉を集めるべき。万博に来られなかった人(特に離島の方など)にも届くような形を作れるとよい。万博で得た刺激によって何が変わり、何をするようになったかという行動変容の軌跡をリアルタイムで発信・共有していくような場が作れるとよい。例えば、自ら行動変容して持続可能な取り組み・暮らしをしている人達をうまくピックアップ・紹介していくネットワークができると面白いと思う。(河森氏、小山氏、河瀬氏、藤本氏)
- ・ 技術の社会実装については企業がうまくやっけていける分野とと思っている。過去博においても万博を起点とした取り組みが成果を上げており、今回の万博でも発展に寄与する形になるとよい。(河森氏、石川氏)
- ・ 万博で活用された技術の中でも、まだまだ実用レベルでないものもある。(同時翻訳システムを摘示) 早く実用的なシステムが生み出されると、日本に特徴的な文化や考え方を世界に伝えていく一助になると思う。(河瀬氏)
- ・ 万博本番を迎える前からすでに自然と深いつながりや交流が生まれていた。さらに、会場内で各々が体験を創り、それを広め、実際に共有する中で自分たちには見えないレベルで新たにつながり・交流が生まれていた。そのつながりは万博が終わっても続いている。(中島氏、小橋氏)
- ・ 万博のテーマ『いのち輝く未来社会のデザイン』は、従来の功利主義的な成長や効率の最大化を超え、beyond SDGsの視座から、多様性そのものを価値創出の源泉とする社会モデルを提示した。違いを調整対象とするのではなく、違いが相互作用することで新たな価値が立ち上がる構造を示した点に本質がある。この価値

観の転換こそがレガシーの核であり、今後の政策や制度設計へと実装されるべきである。(宮田氏)

(万博を契機とした活動について)

- 活動を続けていくこと。またそれにとどまらず、何かしら緩くつながりながら活動できるような仕掛けを作っていくことが重要。小さな草の根活動も大事だが、大きく活動し、かつ連携していかないと人々の印象に残らない。(河森氏、小山氏)
- 人々がチャレンジできる環境作りやそのための教育を行っていくことが重要。表彰や教育プログラムを継続的に実施していくことで、チャレンジを促す土壌を作りたい。(藤本氏、石川氏)
- 違いから立ち上がる未来、違いこそを力に変えるという考え方が、今回の重要なポイント。五感で感じて、価値を創出するところが今後の中核になる。参加者が五感を通じて体感した万博の魅力を言語化していくことで、万博のテーマを紐とくヒントが出てくると思う。(宮田氏、中島氏)
- 万博で提示された新しい価値観は継承されるべき。いのちや死について今一度みんなで考えるという側面は、教育文化活動の側面を大きく持っている。(福岡氏)
- アーティストにとっては、既存の権威に徒に左右されずフラットに活動できる場が大事。万博のレガシーを引き継いだイベントを実施できると良い。定期的にレガシーを思い出し、ストーリー付けをしていくこと、万博での表現をいかに持続的に展開していくかが大切。万博は1つのジャンルに閉じない世界観に大きな意味があった。(落合氏)
- 企業や自治体、個人の枠組みを超えて幅広い形で参画できるイベントの形は古来からの祭りの形であり、その祭りの形を継続させ、進化させていくと、もっとグローバルに人のつながりが生まれていくと思う。(中島氏、小橋氏)
- 文化は静的な遺産ではなく、人と人、人と世界のあいだに関係性を生み出す『動的な共鳴インフラ』である。万博で示されたのは、文化を保存・継承するという従来の枠組みではなく、社会の中で新たな対話や行動変容を生み出す基盤として機能させる可能性であった。レガシーに関する活動もまた、物理的な保存や一過性のイベントにとどまらず、価値を持続的に生み出す構造として設計されるべきである。(宮田氏)

(夢洲を活かした「場」の記憶について)

- 大屋根リングでは、リングの内側に多様な個性のパビリオンが集まり、ひとつになって同じ空を見るという体験をしてほしいと思った。民間の力も使って、万博が終わってもまた同じ空を見る体験ができるようにしてほしい。(宮田氏)
- 大屋根リングをどういう形で残すかが大事。いかにして人が集まるもの/集客できるものを作れるかが重要。人が集まらないレガシーはありえない。一方で、IR

と万博レガシーとはコンセプトが異なる部分があるので、地理的に近接する両者の上手な棲み分けが必要。(石黒氏)

- ・ 人材育成や活躍の場を提供しつつ、賑わいをどう持続させていくかが重要。収益性のある事業としないと持続しない。(石川氏)

## (2) プロデューサーごとの取り組み予定

### ○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 宮田 裕章 氏

生態系保全、次世代教育、文化芸術、国際連携といった領域を通じて、人と自然、地域と世界の共鳴を促進することを目的として「静けさの森共鳴機構」を設立。そのコンセプトに合致するような取り組みを認証して支援する仕組みや、万博の熱狂を未来へ繋げていっている人を表彰するアワードを作りたい。また、夢洲の場の記憶に関しては、まさに万博において日本が国内外へ打ち出したユニークな価値観や世界観を、引き続き海外を含むこの人間社会にひろく発信できるよう、設計・運営されることを期待している。広島の平和記念公園や、大阪万博での太陽の塔などは参考になるのではないか。

better co-being という視点、五感で感じることの重要性を発信していきたい。飛騨を拠点にした大学を作って地域全体と未来をつなぐような形の新しいチャレンジを進めている。例として再エネの小水力発電とアートを組み合わせた場所で、学生同士が切磋琢磨しながら、地域の職人から学びながら、魅力を発信していく場所などがある。現在は全国 15 箇所の拠点と同様の取り組みを進めている。

### ○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 石黒 浩 氏

京都府ふるさと納税(企業版)を活用して資金を集め、けいはんなの ATR にいのちの未来研究所を設置。けいはんなオープンイノベーションセンターに、万博において展示していたアンドロイドの一部を移設し、2月21日にオープニングセレモニーを開催。他にも、各地方の美術館等からアンドロイドの再展示の依頼あり。こうしたアフター万博の取り組みを通じて、様々な理由により万博の現場を訪れることが出来なかった人々、特に子ども達を含む将来世代に対して、万博のレガシーを継承・展開していきたい。

### ○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 中島 さち子 氏

クラゲ館では、年齢や立場、障害や病気、国などの違いをこえ、多様な方に働き手・作り手として会期中も前も参画してもらった。多様な方が「つくる」から共に参画し、新たにルールを生み出すことが大切。万博での実績を社会実装へ。また、学びや人材育成が大きく変わる時代。文理融合の創造的な学び STEAM 教育などをより推進し、創造性の民主化へ。

万博では、160 近い国々が半年もの間同じ場所に集い、多彩な国際交流が生まれた。「場」は重要。クラゲ館の多文化協奏バンド「KURAGE Band」をハブに、ここまで多くの自治体や国と協奏してきたが、協奏はアフター万博でも鋭意継続していく。(クラゲ館は移設他、多くのハードも未来に残す。)

文化版ダボス会議のような様々な対話、さらにワークショップや祭りが一体になったアフター万博イベントを開催し、いろんな文化や子供たちの創造性が発揮できる、学校・大学・企業・病院・芸術家らの未来協奏の文化×科学の場を育てていきたい。

○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 落合 陽一 氏

万博をきっかけに、海外の大学との相互交流が生まれている。

null<sup>2</sup>で使用していた技術について、特にミラードボディやAI等については、民間企業と連携した商用化も進めている。

現在、パビリオン制作過程や来場者に体験頂いた様子等を一連の物語とした映画の制作を進めている。既に試写会も2回実施しており、万博の物語をレガシーとして残そうと考えている。

地理的に万博に来ることのハードルが高かったと思われる、関東地方在住の人々に向けては、万博の記憶の継承として2027年の横浜園芸博へ出展する予定。null<sup>2</sup>の建築材料についても、再活用できないか検討中。スポンサー集め等は大変だが、万博で生まれた「屈強なファン」たちの力も借りながら、関東地方や日本全体にレガシーを根付かせられるようにしたい。

○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 福岡 伸一 氏

いのちが絶え間なく自らを壊しながら作り直すことで動的平衡を保っているというメッセージを、万博後も広く世の中に伝えていくための活動主体として、万博中に一般財団法人いのち動的平衡財団を設立した。様々な理由で万博会場に来ることの出来なかった人々、また、その中でも特に日本の将来を担う子ども達に向けて万博のメッセージを伝え続けていくことを使命とし、ポスト万博の位置付けで、全国や海外でも巡回展の実施を計画している。また、将来世代の育成という観点では、奨学金のように彼らの飛躍を助けるような取り組みが重要。

○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 河森 正治 氏

本パビリオンのキーコンセプトである「人間中心から、あらゆるいのちの共鳴への意識変容、行動変容」を継承すべく、超時空シアターをはじめとした展示の巡回展を企画。

人やお金や情報の一局集中をさけるため、万博記念公園をはじめ、地方自治体や2027横浜のグリーンエキスポや海外への展開も視野に検討中。

パビリオン本体については、何力所かに分割して全国各地に移設する方向。HPC(海水練りコンクリート)は水資源の大切さを伝えるというコンセプトそのものが広がる形で展開予定。

さらには、AI化してゆく社会への対応も含めて、いのちの輝きを感じて(意識変容)行動(行動変容)できる人々を育むべく、感じて行動する力『感動力』を養う、生態系・実体験型のワークショップや、講座なども進めてゆきたい。

足下では、万博記念公園に「いのち球」(河森館での展示物)を移設して、創作展を実施している。

○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 小山 薫堂 氏

EARTH MART FORUM という、「食」に関する仕事をしている人たちを集めたイベントを企画・開催し、ビジネスにも繋がる出会いの場を作ることができた。今後も開催してほしいとの声から、2～3年に1回、食を取り巻く関係者を集めたイベントとして継続開催することを検討中。

観光拠点となる「食」をテーマにしたミュージアムを日本全国に増やし、生産者の応援や子どもたちの食のリテラシー向上につなげたい。

子どもたちに対して、いのちと食の関わりについて伝えることができた点には手ごたえがあった。今後、パビリオンで発信したことを授業の教材として活かしてもらうことを検討中。

○ 大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー 河瀬 直美 氏

会期中、パビリオンではシアター形式での対話を実施。対話のアーカイブも、みなさんに見てもらえる形で未来に届けていきたい。パビリオンについては、中心にイチョウの木がある風景ごと移築する計画を進めており、移築を受け入れてくれる自治体と積極的に関係性を構築していきたい。できるだけ万博で展示していた内容は継承していきたいと考えており、同窓会のような形で定期的に対話イベントを開催したい。また、交流が生まれた参加国とのコラボレーションも検討したい。

○ 大阪・関西万博 会場デザインプロデューサー 藤本 壮介 氏

宮田プロデューサーと共同で進めている「静けさの森共鳴機構」を活用し、アワードや教育を通じてチャレンジするマインドセットを作りたい。アワードにおいては、万博で打ち出した価値観や方向性に沿った活動を進めている人を表彰し、人々の自発的な取り組みをさらに促進するとともに、それらを広く世の中に発信していきたい。一方、単発的なアワードでは一過性のものになってしまうため、教育的観点を重視して継続的に実施したい。共鳴機構については、国のお墨付きをもらいすぎると、却って活動の幅が狭まってしまう可能性も有るので、複数あるレガシー展開取り組みのうちの一つとして扱うべきだろう。

○ 大阪・関西万博 会場運営プロデューサー 石川 勝 氏

「EXP02025 Initiative」と題し、テーマウィークを継続実施し、プロデューサーによる社会人講座や若手クリエイターの育成に活用したい。また、将来起業するかも知れない若手人材に対して「事業企画スペシャリスト養成講座」を会期前から実施しており、今後も継続予定。自身のこれまでの経験を次世代に伝えていきたい。

万博で活躍した人材の流出を防ぐため、プロフェッショナル人材のキャリアを継続させるための仕組み作りを検討中。また、万博を契機に「イベント・MICE サステナブル運営コンソーシアム」を立ち上げ、若手人材へのセミナーやガイドブックの発行等に取り組んでおり、今後も継続予定。

○ 大阪・関西万博 催事企画プロデューサー 小橋 賢児 氏

万博の経験を活かし、都市開発に関わっている。新技術（IOWN など）を活かして、モノとヒトがつながり合う時間を作りたい。夜の街に広がる光の世界を通じて、あらゆる人が当たり前宇宙につながっており、同じ空を毎日見られるようにしていきたい。「One World, One Planet.」を会期中 184 日やり切った経験が礎になっている。身近に、大阪・関西万博という事例があることで、実装できる可能性がぐっと高まる。

以上